講演

「中枢都市・広島を考える」

九州大学経済学部教授
国土庁国土審議会計画部会専門委員会委員長代理
矢 田 俊 文

1．はじめに

私は、経済地理学の一分野して、国土構造論に取り組み、近年７～８年国土政策とか地元の地域政策に関わってきました。そういう立場と広島のライバル福岡に住んでいるという立場の両方から話をすることにします。日曜日に駅伝があり、最後は広島と福岡が競りまして、ついに福岡が負けました。下位の方から一気に抜いて、最後の最後で広島が勝ったという、都市間競争がそうであればと思っている人が会場には多いのではないでしょうか。

1970年代以降、日本の成長都市のトップになっている札仙広福という中枢都市というのは、一体何故成長したのか。それを中枢都市の持っている機能というところから捉えると、おのずと札仙広福の共通性と差異性が出てくると思います。それが前半の話で、後半は次期全総にからんでどういう戦略で中枢都市を生きたらいいのか、話したいと思います。ここに資料があります。この資料は殆どＮＩＲＡの研究報告・東北開発研究センター編からもってきました。これは東北大学の阿部先生、広島大学の櫟本先生、北海道大学の小林先生と私の４人を中心にした研究会の成果を纏めてもらったものです。１年目がＮＩＲＡ、２年目が札仙広福の市自体が財源と情報を提供して頂きました。もう一つは審議中の国土審議会の「基本的考え方」についての資料を持って参りました。

2．札仙広福の成長とその理由

表１は1990年の札仙広福の人口指標です。たいてい市の通勤圏人口を比較します。ここでは行政区画での比較より都市の力を表現していると思います。通勤圏人口を都市圏人口と考えた場合に、札幌は220万、福岡はほぼ270万で、むしろ福岡の方が大きい。次が仙台・広島が170万前後です。福岡・札幌・広島・仙台という順序となっています。人

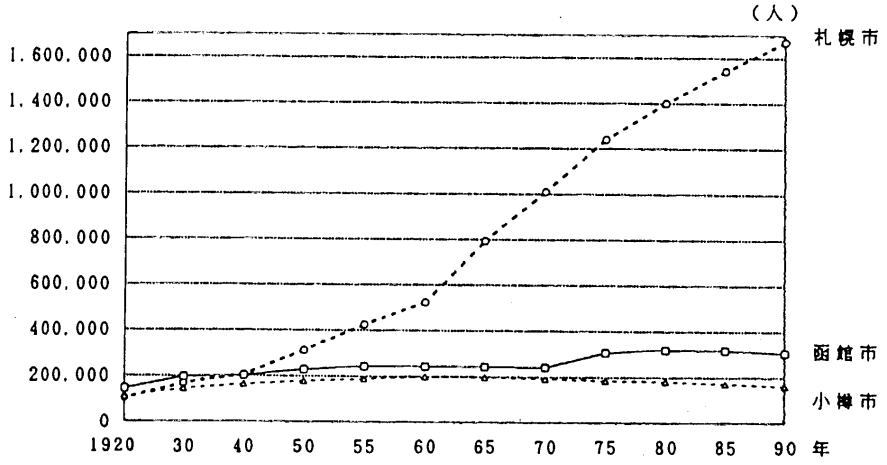
表１　札仙広福の人口指標

	単位	札幌市	仙台市	広島市	福岡市
Ａ人口総数	千　人	1,672	918	1,086	1,237
指数		182	100	118	135
全国比	〃	1.3	0.7	0.9	1.0
面積	㎢	1,121	784	740	336
人口密度	人／㎢	1,491	1,172	1,467	3,677
夜間人口	〃	1,665	912	1,081	1,230
昼間人口	〃	1,699	990	1,127	1,409
昼夜間比率	%	102.0	108.5	104.2	114.6
ＢＤＩＤ人口	千　人	1,571	774	948	1,164
ＤＩＤ人口比率	%	94.0	84.3	87.4	94.1
Ｃ５％通勤圏人口	千　人	2,200	1,695	1,783	2,730
指数		130	100	105	161
同上　市・町・村		5.5.1	8.27.1	5.22.1	12.29.1
Ｃ／Ａ	%	131.6	184.6	164.2	220.7
Ｄ広域市町村圏人口	千　人	2,024	1,292	1,352	1,988
同上　市・町・村		4.3.3	5.8.1	3.9.0	7.14.1
Ｄ／Ａ	%	121.1	140.7	124.5	160.7
Ｃ／Ｄ	%	108.7	131.2	131.8	137.3
Ｅブロック人口	千　人	5,644	12,213	7,745	13,296
Ａ／Ｅ	%	29.6	7.5(9.4)	14.0	9.3
Ｃ／Ｅ	%	39.0	13.9(17.4)	23.0	20.5

資料：総務庁「国勢調査報告」1990年
　　自治省監修「広域市町村要覧」平成２年改訂
注：1)ブロックは北海道、東北７県、中国５県、九州７県
　　2)Ａ／Ｅ、Ｃ／Ｅの仙台市（　）内は東北６県人口に対する比率

口密度は、札幌・仙台・広島がだいたい同じ密度ですが、福岡だけは３倍以上となっています。言ってみれば札仙広福というのは、約200万前後の地方拠点都市として形成されてきたということかと思います。図１～４は人口推移で、だいたい急増しているのは合併したためです。これを見ますと、仙台と新潟、広島と岡山、福岡と熊本の差が明確に

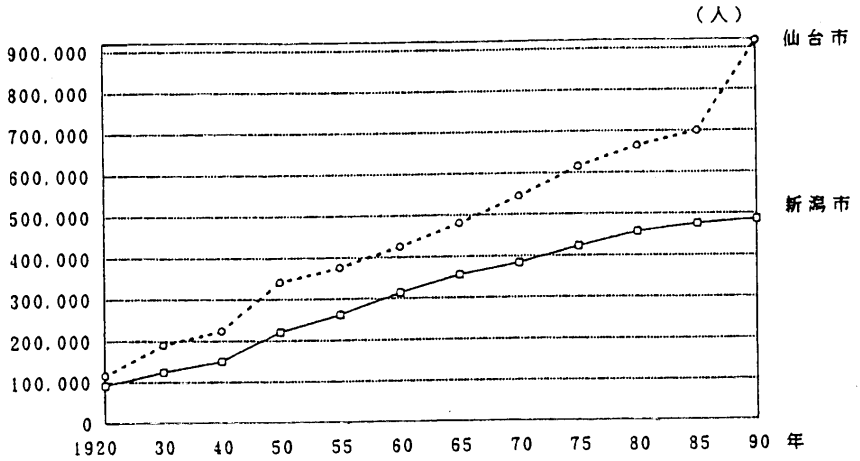
図１　人口の推移（札幌）



資料：総理府統計局「国勢調査報告」

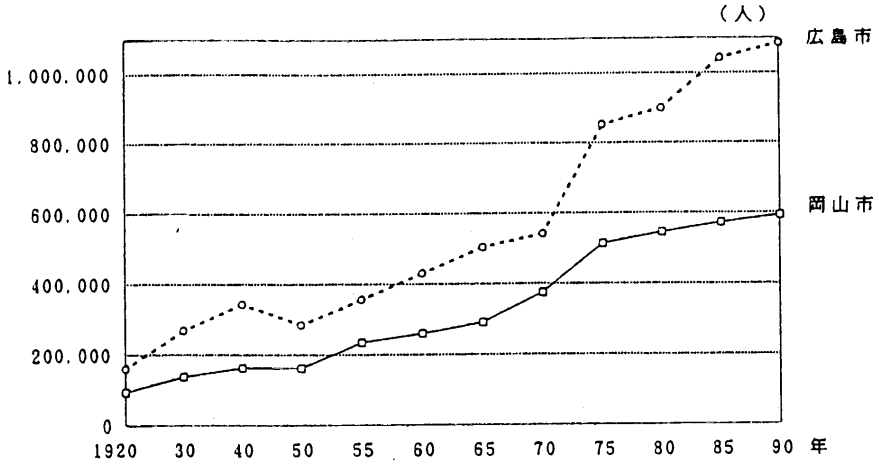
つくのが1970年以降と見てもいいのかなと思っています。単なる県庁所在都市からブロック中枢都市に成長していく過程というのが、おそらく70年代から80年代の20年間位のところではないかとみられます。

図２　人口の推移（仙台）



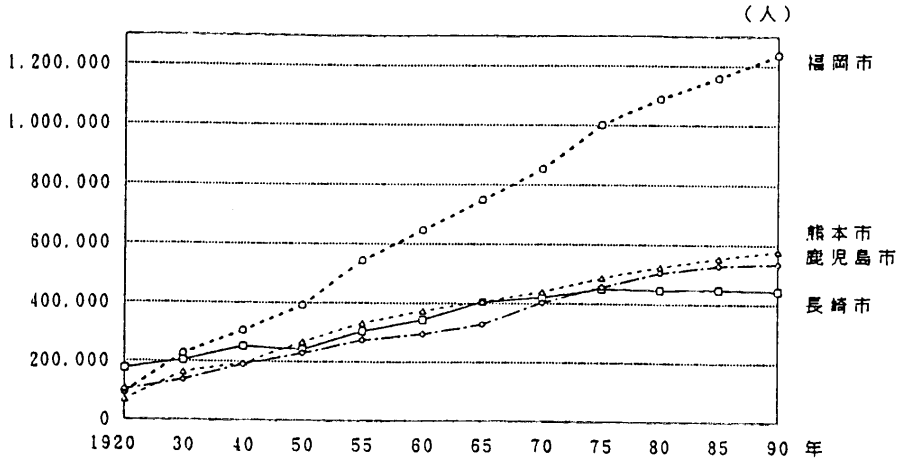
資料：総理府統計局「国勢調査報告」

図３　人口の推移（広島）



資料：総理府統計局「国勢調査報告」

図4　人口の推移（福岡）



資料：総理府統計局「国勢調査報告」

それでは、なぜ新潟、岡山、熊本と差をつけて、この仙台・広島・福岡が成長してきたか。私は大雑把に言って三つあると思います。一つは新全総におけるネットワーク構想の成果だと思います。国土を高速交通体系でネットワーク化していく中で、三大都市プラス四つの中枢都市を結合して国土の軸をつくると提案したのが新全総です。それから確実に、特に高速道路や新幹線も整備してきました。国土の軸から三大都市圏を除いたのが札仙広福であった。第二にそれをベースにして、大企業が70年代以降、ブロック毎にはっきりと拠点を作り始めました。いわゆる支社経済都市を作ってきた。その際に、札仙広福プラス東京・名古屋・大阪という七大都市を明らかに拠点化してきた。第三番目は、高速交通体系が整備されつつあると同時に、人の移動が広域化し、なおかつ札仙広福などより高次な消費都市を求める動きがはっきりしてきました。この三つが結合して80年代後半になって、中枢都市札仙広福が頭一つ出てきた。

3．多分野からの国土政策づくりへの参画

ところで、地域開発とか国土政策とか言いますと、我々はいかなる学問をバックにして話をしたらいいのかというところがあります。環境問題もそうですし、大変取っつきやすいわけです。目の前にある都市の問題も分かるし、環境問題も何か自分ですぐ分かりそうだし、地域開発も自分の地域の開発ですからすごく興味を持ちますから、いろんな学問の人達が参加しています。櫟本先生のように統計学から地域統計を解析しながら提案してくる場合もありますし、土木・建築の方から、特に土木の方から道路網の整備そのものを考えながら、地域戦略を考えてくるということもあります。中小企業や農山村地域を調査しながら地域に参入している人もいます。これほどいろんな人達が地域開

発や国土政策に関与する学問もないわけで、主流は何かよくわからないわけです。私は地域構造、つまり経済の空間システムというものがどういう論理構成に成り立っているのか、そういうところから国土政策に関与しています。ところが日本の国土政策は建築・土木が主力となっています。委員会も殆ど土木・建築関係で、経済関係の人はあまり入っていません。最近ようやく中小企業とか農業関係の人が入っています。国土政策というのは公共投資を地域的にどう配分するかという基準を作るということです。従って公共投資関係の予算に絡んでいる建設と農水と運輸の関係の先生達が中心になって委員会を構成しています。

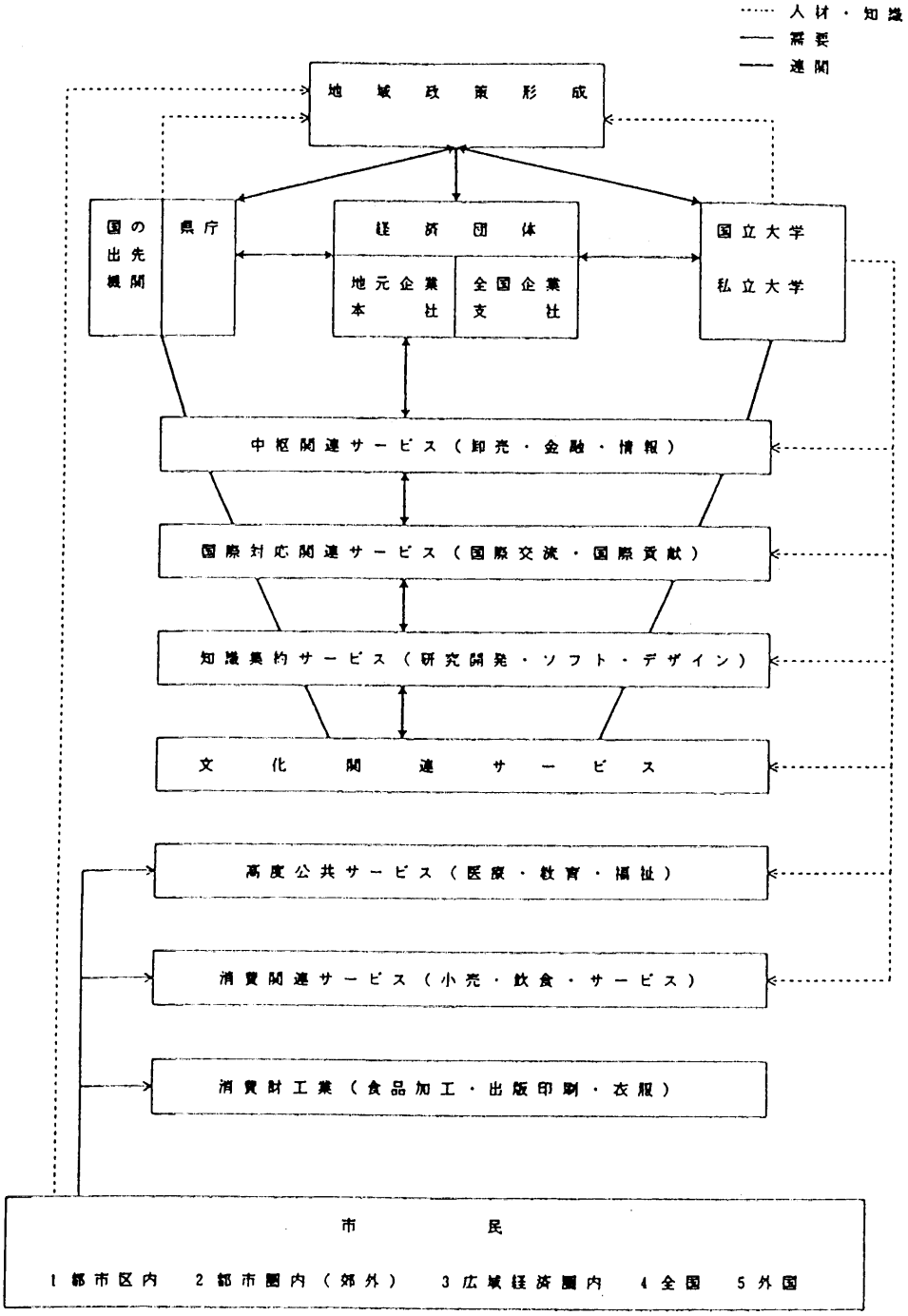
櫟本先生や私のように経済学系から参加しているのはそれほど多くありません。従ってどういうルートで高速道路や新幹線を作ろうかという発想が圧倒的です。その方がわかりやすいし、地元の利益に直結する。これに対して、私の話はそういうものとは馴染まない。人々や企業がどういう空間運動をしているのだろうか。国土は東京一極集中であろうが、広島一極集中であろうが、企業が勝手に選択したわけです。自由に工場を配置し支店を配置し、そして我々だって強制されずに居住地を選択しています。東京がいいか田舎がいいか、あるいは福岡とか広島がいいかというのも、全く我々が意志決定できます。その集合として一極集中的な国土構造が出来上がっているのです。その市場メカニズムというものをきちんと理解しない限りは、こうすべきだということを言ったところで、事態は何も動かないです。これが経済学から見たところの空間システム論であります。

では何故工場とかオフィス、あるいは個人の居住地選択というのが、そういう方向にいくのだろうか。そのメカニズムをはっきりさせないと、なかなか国の政策だけではうまくいきません。道路を引けば大都市圏から地方に分散するかというと、道路を引けばかえって大都市圏へ集中することもある。道路を引いたお蔭で却って過疎化することもあります。しかし道路を引けば確実に過疎化するかというと、道路を武器にしてより新しい拠点にすることもできます。ですから道路によって事態が解決するとは思いません。

4．都市の階層化をとらえる３つの視点

ここで中枢都市が一体どのような機能を有しているのだろうか考えてみたいと思います。図５は私が作ったものですが、二つの理論を前提にしています。一つはクリスターラというドイツの人の理論です。人々は生活の中心的な消費財を中心地に求めていく。非常に簡単な中心財をもとめる中心地から、非常に高次の中心財を求める中心地まで、財の性格によって都市のハイラーキが出来上がっていく。これを非常に綿密に理論化したものです。それに応じて都市の階層性が出来上がってくる。これを我々はクリスターラシステムと言っています。人々が消費生活の中で必ず階層的な都市システムを作っていく。図では消費関連サービス、小売・飲食、高度公共サービス、医療・教育・福祉と

図5　中枢都市産業連関イメージ図



（矢田俊文委員　原図）

いった消費サービスを提供するものとしての都市を考えています。これがどうも700万から1000万近い人々に対するサービスを意識した、非常に高度なサービス拠点として中枢都市が成立しています。インフラが整備されると、かなりの若者が広域移動します。若者でなくても主婦も広域移動します。買い物の階層性も文化サービス・福祉・医療の階層性もかなりハッキリしてきますから、広島県における高次サービスの拠点としての広島市から、より広域的な山口・岡山・島根などを含めた医療拠点、教育拠点、あるいは文化拠点としての広島市が成立しているわけです。これが高速交通ネットワークが整備されればされるほど、500万から1000万都市を単位にして、かなりハイクラスな都市が出来上がってきました。その典型的な都市が札幌・福岡であり、仙台・広島である。これらはクリスターラシステムに於ける非常に高い次元の都市となっているわけです。

もう一つはアメリカのプレッドという人の理論です。これは国とか大企業などの巨大組織が全国を管理をする時に、各地に拠点をつくり上げていく。例えば企業は、重要な都市に支社や支店や営業所を作っていく。これを情報拠点や販売拠点にしていく。巨大組織、ナショナルレベルの組織が上から都市をシステム化していく。そこに階層性を作っていく。これをプレッド的な都市というシステムと言います。巨大管理組織がどこの都市に支社を置き、どこの都市に営業所を置くかという時に、歴史的に先行して形成されたクリスターラ的なシステムを利用する。こうして上からと下からの都市システムが一致してくるケースが多いわけです。

一致しない場合もあります。山口県の下関と山口や福島県における福島と郡山のように経済拠点都市と管理都市がずれてきます。大抵は下からのシステムと上からのシステムが一致してきますから、これがおそらく北海道・東北・中国・四国の一部そして九州という広域ブロックを相手にして、巨大企業や国の組織が管理システムを完成することと、消費者がより高次な都市機能を求めて、自分達の行動の範囲の中で高次機能都市機能を作り上げていくことと、そして新全総における高速交通体系の整備の三つがドッキングすることによって、それぞれブロックの中にトップクラスの中枢都市が形成されてくる、これが中枢都市の中心的機能ではないかと思います。

従いまして図５は、管理的な都市として、一つは国の出先機関、一つはいわゆる企業の側の地元企業本社、特に電力を中心とする巨大本社、それから全国的な企業における支社の集中、そして旧帝大ないし広島大学のような基幹大学と言われる、だいたい10学部以上もっている大学で学生定員が2500人の国立大学、これらがみごとに中枢都市に配置されています。何が先で何が後か、旧帝大が先で電力本社が後かその辺は議論する余地がありますが、その管理拠点が集積している所が、他の企業の支社配置においても拠点になっています。そして企業の市場戦略のニーズに合わせて、高速道路・新幹線・ジェット網というものを作り上げていく。これが新全総の最大の狙いであり、その後の投資が20年営々として続いてきた。これが国土軸という言葉でまた違った投資の基準をつくりますと、これから20～30年投資の傾向がかなり変わってくると思います。国土軸という

のをどう見るかというのは、大変議論のあるところです。要約すれば企業の行動と個人の生活行動と国のインフラ投資の三つが合体して、札仙広福が急速に浮かび上がってきたと見たらいいのかなと思っています。

5．国際交流と知識財生産の重要性

さらに80年代から90年代初頭における中枢都市が、違った芽が見られるというのが、この図の一つのポイントです。金融や卸売はプレッド的な支社がある結果として金が動き取引が行われます。そしていろんな情報の拠点になってきます。これらが中枢関連サービスということになります。そういう中枢関連サービスがあり、また高度な消費機能が成立する中から、人材が定着します。大学の存在も大きな役割を果たします。地方における人材定着が強まっています。この人達の担うものが知識財産業です。原料が知識で製品が知識で具体的にはソフトウエア、デザイン、研究開発などです。これが今アジアとの比較優位を確保するのに、最も要求されている知識集約サービスや知識生産型産業です。

こうした知識財産業は、言うまでもなく圧倒的に首都圏のシェアが高い。名古屋では非常に弱い。関西圏はもちろん第２についていますが、名古屋を追い越す勢いで福岡が高いポイントをあげています。札仙広福というのはもはやブロックにおける情報拠点・管理拠点・消費拠点だけでなく、もう一つ踏みこんで知識生産都市となりつつあります。人材集積や大学の集積をバックにして、三大都市圏に次ぐ知識生産都市としての立場を鮮明にしています。これがこれからの国際化・情報化の中で、単なる中枢都市としてあるいはブロック拠点都市から離れて独自の知識財生産拠点となろうとしています。広島市は他と違いまして物作り拠点でもあります。自動車やビールの生産拠点です。物作り拠点としての広島は札幌と仙台と福岡と大分違った特色を持っています。三大都市圏の中でも名古屋もどちらかというと物作りにシフトしています。札幌・仙台・福岡は、消費都市というレッテルで甘んじていましたが、これから知識財生産都市、あるいは情報生産都市、こういう所に新しい核を見いだすのではないかと思います。

これと関わって文化関連サービスの集積があり文化的な拠点都市ともなります。さらに、国際交流拠点都市としての性格も加わります。こういう点では、札仙広福をみますと差が出てきます。表２に札仙広福の成長率があります。広島と福岡を比較しますと福岡は通勤圏人口がちょうど1.5倍です。製造業の出荷額をみますと、全く反対で福岡の３倍の出荷額を広島が誇っています。府中町がこの統計に入らないにも関わらず、これだけ高い値を示しています。卸売業の販売額の比較を見ますと福岡が広島の丁度1.5倍です。情報サービス産業をみますと、福岡が約1.9倍という数字が出ています。国際便の乗降客がこれまた20倍近い。これからの国際化・情報化・知識集約化という形でマクロ経済が動いていきます。その中での福岡と広島の差は大きな意味をもってくると思います。中

枢都市は、ブロックの中での消費拠点・管理拠点というだけでは時代の流れにのっていけない時に、この情報サービスや国際機能を強化することが肝要と思います。この辺がこれから21世紀の広島を考えた時に大きなポイントになってくるかと思います。

表２　札仙広福の成長率

(1)人口		1970	1980	1990	80/70	90/80	90/70
札幌市	人	1010123	1401757	1671742	139	119	165
仙台市	〃	545065	792036	918398	145	116	168
広島市	〃	541998	986724	1085705	182	110	200
福岡市	〃	853270	1088588	1237062	128	114	145
全国	百人	1046652	1170604	1236112	112	106	118
(2)通勤圏人口		1970	1980	1990	80/70	90/80	90/70
札幌市	人	1407698	1878326	2200059	133	117	156
仙台市	〃	1084873	1450279	1695394	134	117	156
広島市	〃	1565456	1616119	1782588	103	110	114
福岡市	〃	1654449	1777929	2730317	107	154	165
(3)製造業出荷額		1971	1980	1990	80/71	90/80	90/71
札幌市	億円	2361	6214	8320	263	134	352
仙台市	〃	1549	6843	9704	442	142	626
広島市	〃	4015	16077	28427	400	177	708
福岡市	〃	2281	5720	9158	251	160	401
全国	10億円	72172	212124	323373	294	152	448
(4)卸売業販売額		1970	1982	1990	82/71	90/82	90/70
札幌市	億円	13411	81050	106705	604	132	796
仙台市	〃	11362	70130	105107	617	150	925
広島市	〃	14031	67602	105135	482	156	749
福岡市	〃	26182	114401	160338	437	140	612
全国		883309	3985362	5731647	451	144	649
(5)情報サービス		1973	1982	1991	82/73	91/82	91/73
北海道	百万円	2000	13288	146328	664	1101	7316
宮城県	〃	2003	9732	67200	486	691	3355
広島県	〃	2618	9619	100599	367	1046	3843
福岡県	〃	4809	12794	188536	266	1474	3920
全国		167162	911907	6875247	546	754	4113
(6)国際便乗降客		1981	1988	1992	88/81	92/88	92/71
新千歳	人	23609	7244	246753	31	3406	1045
仙台	〃	13033	6711	232410	51	3463	1783
広島	〃	0	1121	104669		9337	
福岡	〃	620212	1075457	1894032	173	176	305
全国	百人	130421	257607	332090	198	129	255

資料：総務庁「国勢調査報告」
　　通産省「工業統計表」、「特定サービス業実態調査報告
　　運輸省「航空統計年要覧 1992-93版」
注：1)人口、工業出荷額は現市域への組替数
　　2)新千歳の1981～1988年は千歳空港の数字

６．教育・学術機能にみる広島の弱さ

ところで札仙広福が大都市化しつつある時に、新しい芽に着目しますと差がつきはじめているかなという感じがします。一つは表３の教育・学術機能の集積です。これも知識財産業・人材集積・人材定着と深くかかわってきます。ここで、大学数・学部と大学院の入学定員数の対全国比、対ブロック比が書いてあります。ブロックにおけるシェアでいきますと、札幌はブロックにおける学部・学生定員の６割を占め、高い集積を示しています。福岡市は、わずか34%です。しかし、絶対規模をみますと、札幌・仙台・広島が大体８～９千人に対して福岡が１万３千人で、約５千くらいの差をつけています。

もっとはっきりするのが表４です。大学進学者数（A）と県内の大学入学者数（B）があります。ここでA＞Bだと、大学に行きたくても県内に残れない、また選択を狭め

表３　高等教育・学術機能の集積

1.　大学・大学院　　校、人、％

	大学数				入学定員数・学部				入学定員数・大学院				合計
	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計	
(1)実数													
仙台市	2	－	6	8	3034	－	4875	7909	1530	－	105	1635	9544
札幌市	2	1	7	10	3852	190	4990	9032	1338	31	94	1463	10495
広島市	1	2	8	11	2993	450	4865	8308	862	－	126	988	9296
福岡市	2	1	8	11	2761	180	10435	13376	1359	10	488	1857	15233
(2)全国シェア													
仙台市	2.04	－	1.54	1.50	2.94	－	1.36	1.65	5.20	－	0.50	3.10	1.80
札幌市	2.04	2.17	1.79	1.87	3.74	1.22	1.39	1.89	4.54	1.46	0.44	2.78	1.98
広島市	1.02	4.35	2.05	2.06	2.90	2.89	1.35	1.74	2.93	－	0.60	1.87	1.75
福岡市	2.04	2.17	2.05	2.06	2.68	1.16	2.90	2.80	4.61	0.47	2.31	3.52	2.87
(3)ブロックシェア													
仙台市 1	20.0	－	24.0	21.1	25.6	－	45.8	34.2	44.8	－	26.1	42.5	35.4
2	28.6	－	28.6	25.8	32.6	－	48.5	39.6	64.7	－	43.4	62.0	42.2
札幌市	28.6	50.0	35.0	34.5	75.5	43.2	56.8	63.0	84.6	100.0	58.0	82.4	65.2
広島市	33.3	20.0	38.1	34.4	28.6	12.8	90.0	59.1	67.3	－	136.3	78.2	60.9
福岡市	14.3	14.3	25.8	21.2	20.3	7.3	45.6	34.4	44.9	11.2	63.1	47.7	35.6

資料：文部省監修「全国大学一覧」平成５年度
注：平成５年４月現在

表４　大学進学者の進学先都道府県

人、％

	大学進学者数 A	大学入学定員（ブロック内計） 国立	公立	私立	計B	B－A C	自県内進学率	進学先・道県順位 1	2	3	中枢県への進学率
北海道	15050	5923	440	8785	15148	98	70.3	道内	東京	神奈川	70.3
東北	32904	11838	620	10650	23108	-9796	27.9	東京	宮城	神奈川	21.9
青森	3903	1209	300	1555	3064	-839	23.9	県内	東京	宮城	11.6
岩手	3616	1295		760	2055	-1561	24.4	県内	宮城	東京	19.4
宮城	6739	3034		5625	8659	1920	56.7	県内	東京	岩手	56.7
秋田	2951	901		600	1501	-1450	25.2	県内	東京	宮城	25.2
山形	3330	1881		300	2181	-1149	18.9	東京	県内	宮城	16.8
福島	5602	990	320	1410	2720	-2882	18.0	東京	県内	宮城	12.5
新潟	6763	2528		400	2928	-3835	17.3	東京	県内	神奈川	3.9
中国	33206	9644	1410	11595	22649	-10557	25.7	広島	東京	大阪	19.3
鳥取	1964	1090			1090	-874	13.1	東京	県内	大阪	5.0
島根	2677	1185			1185	-1492	14.4	県内	東京	広島	13.4
岡山	8997	2375	300	4040	6715	-2282	25.5	県内	東京	広島	10.2
広島	13384	2993	450	6225	9668	-3716	34.8	県内	東京	福岡	34.8
山口	6184	2001	660	1330	3991	-2193	15.0	福岡	県内	東京	10.3
九州	47112	13610	2455	23325	39390	-7722	39.4	福岡	東京	熊本	38.7
福岡	18827	4615	1595	15575	21785	2958	61.3	県内	東京	熊本	61.3
佐賀	2827	1375		190	1565	-1262	14.0	福岡	県内	東京	40.5
長崎	5587	1485	460	620	2565	-3022	18.2	福岡	県内	東京	26.4
熊本	5828	1800	200	3540	5540	-288	39.5	県内	福岡	東京	20.7
大分	4788	1115		1020	2135	-2653	14.1	福岡	県内	東京	25.8
宮崎	3659	1035	200	1000	2235	-1424	15.9	福岡	県内	東京	17.9
鹿児島	5596	2185		1380	3565	-2031	36.6	県内	福岡	東京	17.6

資料：文部省「学校基本調査報告」平成２年度
　　文部省監修「全国大学一覧」平成５年度

ているということになります。地方のほとんどの県はＢ－Ａはマイナスになります。要するに大学に行きたければ県外に出なさいということです。東北においては宮城県だけがプラスです。これが中枢都市の特徴でもあります。九州も熊本が少しだけマイナスです。福岡はＢ－Ａがかなりのプラスの状況です。しかし広島がマイナスの値が高くなっています。広島県出身の人は広島のいずれかの大学では足りないということです。九州各県の県外、進学先のトップはすべて福岡です。さすがに東北は東京のパワーが強いよ

うで、県外のトップは殆ど東京です。九州は東京との競争の中でも、福岡がトップです。しかし、大学を卒業して福岡にいるかというと３分の２は出ていきます。要するに４年間の通過拠点ということです。広島の場合はそれさえなかなか難しい。これからも中枢都市というのは、消費拠点という性格がますます強まるでしょうし、管理拠点であり続けるでしょう。そのうえに、知識財生産拠点、国際拠点ということも加わっていきます。これによって、三大都市と対抗できる核を形成すると思っています。その辺のところの戦略を広島も鮮明にしていかないと取り残されるのかなと考えています。

７．地域自立支援計画と機会均等の確保

それでは国土政策と中枢都市の戦略をどう絡めて考えたらいいのか、この辺が一つの大きなテーマではないかと思っています。橋口会頭の話にありましたように、本当は全国総合開発などはいらないのではないか。大変面白い指摘で、私もかなり前からそういうことを言ってきました。四全総のフォローアップ作業で、一体戦後50年経って全国計画などというのがいるのか、ましてや開発計画などいるのか。こういったことが国の官僚出身の人からでてきたわけです。五全総などとは言わない。次期全総と言っています。なぜ言わないのかというと、1～4までの計画と質の違うものにしたいわけです。いるというのは殆ど首都圏以外の道府県や経済団体連合会です。

私も、全国計画でどこの地域をどうしようなどということは、規制緩和の時代にあり得るのだろうかと思うことがあります。そういう点では次期全総の基本的な考えを貫くフィロソフィーとは何なのかと、必ずしもよく分かりません。私も前から議論していますが、先程の会頭の話にほぼ近くて、いい加減にいつかやめよう、やめるべきだと思っています。ですから次期全総は地域自立支援第１期計画にしたらどうかということです。

地域が自らの意思で自らの地域を作っていく方向に、思い切って転換する。その為に激変緩和措置として次期全総をとらえたらと思います。地方地域のテイクオフ計画です。今回の案を見ると「自立」という言葉がたくさん出てきます。どう地域自立支援するかというと、広域国際交流圏ごとに自立しようという発想です。小さな自治体が自分の頭で考え活性化しようというのが一村一品運動ですが、より大きな圏域を単位にして自立を考えようということです。リダンダンシーというのは、それぞれのコミュニティから広域交流圏まで、相当の程度、自前で判断し、自前で生活できることにすべきだと思います。これを私は多細胞国家と言っています。今まで東京を軸にしてどう効率的に統合するかというのが国土デザインのポイントでした。しかし、それぞれの細胞がかなりの自由度ができていて、国際交流もダイレクトにやり、人材育成も自前で育成し、そして最終的には地方分権に関わって意志決定をやれる。そういうシステムを作ろうとするのが地域自立支援計画です。

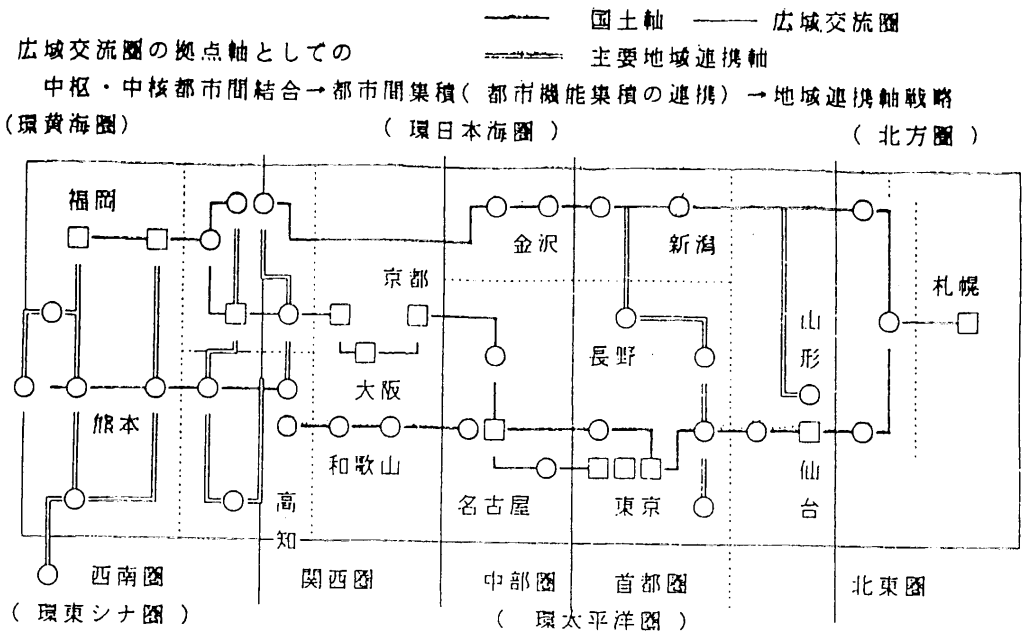
その為に何をするか。元々、結果均等と機会均等という言葉があります。競争条件で

ハンディがついて自立しろというのは無理です。できるだけ条件を均等化していく。後は地域間競争をしかけていく。そこで結果不均等が起きたら補償する必要は全くない。「結果不平等」は努力の関数ですが、不平等というのは元々ハンディがついています。始めからハンディがついて競争すると地方は負けます。基本的には居住地域の如何に関わらず、生活に必要なサービスは、簡単な移動時間とそれほど費用をかけないでサービスは享受できる国土を作る。就業機会であり研究開発機会であり国際交流機会を均等化していく。そういうインフラ整備してそれを使いこなせない地域はそれなりの責任をとるのが地域自立支援だというふうに考えます。地域自立支援というのは国の責任を放棄するという批判があります。確かに言われた通り機会不均等のままご自由に、というのはおかしな話です。

8．国土軸と広域国際交流圏の形成

図6は国土軸と思えるものを素直に書いています。□は政令都市で○は県庁所在都市です。こうするといくつかの都市が国土軸に結びつかない。宮崎、鹿児島、長野、高知などです。これをうまく縦軸の地域連携軸で結びますと、ほとんどの大都市と中枢・中核都市が高速交通体系で結合する。この中枢・中核都市から1時間圏内を円に書きまし

図6　国土軸と広域交流圏



（矢田俊文作成）

て人口を調べますと、約８割強がこの圏内に住んでいます。ということであれば中枢・中核都市とそれぞれの地域住民とのアクセスを１時間圏内の圏域を拡げていけば、９割程がほとんどここに住める。そして１時間圏内において中枢・中核都市のサービスを享受でき、そこまで行って高速交通体系に乗れば別の都市にアクセスできる。こういう形を取るのが機会均等であろう。従って居住地域の如何に関わらず、生活に必要なサービスというものが、かなりのランクの高次サービスまで享受できます。そしてそういうものを整備していくのが国土計画のポイントでありますが、その手段として出てくるのが国土軸であり地域連携軸である。

９．広域国際交流圏構想と広島の将来方向

そしてもう一つはこの図に、広域国際交流圏を書いてみました。広域国際交流圏というのは、環日本海とか環黄海ではなく、簡単に言うと、一千万位の人口を纏まりとして国際交流機能や研究開発機能を整備することによって、三大都市圏以外も自立できるようにしようということです。三大都市圏以外を、どういう単位としてくくるかということは大変難しい。これから論争になると思います。それぞれのブロックに経済連合会がありますし、都道府県知事会議があります。中国というのは岡山が関西を向き、山口が九州に向いている。しかし、これでは小さすぎる。また、一つの纏まったエリアとはいえない。今度また中国と四国の連携が縦軸で結びついていく。図のように西南日本で一つのまとまりを作ろうとするのか、中・四国で一つの纏まりを作ろうとするのか大変難しいと思います。恐らくその選択というのが今後問われることではないかと思います。

例えば中枢国際港湾を三大港湾以外の北と南に作って、神戸のような事故に対して対応すべきです。あるいは国際空港を三大都市圏はもちろん、それ以外に二つくらい作ります。研究開発機能、あるいは教育人材育成機能を地方において強化しようとする。国際化・情報化・知識集約化というものの中で、地方はそれ自体の頭脳で生きれるようにする。これが広域国際交流圏構想の最大の狙いだと思います。大きなデザインはやはりその辺がポイントとなります。中国も一つ、四国も一つ、九州も一つ、北陸も北海道も一つというのは不可能です。広島から福岡・熊本辺りの所の軸を中心にして、国際機能や研究開発機能を整備していく。こうみると、広島あるいは福岡とはどう連携するかということが問われてくる。まさに地元の指導者の発想の柔軟性が相当問われてくる時代になってくると思います。

グラントデザインの中の広域国際交流圏の機能についての文章を読んでみますと、「この交流圏は、大都市圏や地方中枢都市圏等を中心とした世界的な国際交流機能を有する圏域であり、この圏域の中で、国際交通ネットワークへのアクセスや世界都市機能を含む高度な都市機能の提供、製造業等の分野で国境を超えた地域間競争に対応するための世界水準の学術、研究開発機能等の提供が行われる。」要するに、今までの単なる広域経

済圏構想ではなくて、明らかにターゲットがはっきりしていて、国際交流機能というものをこういう単位で整備して機会均等を実現していくと言っている。その為には元々集積がある札仙広福を活用することになる。札仙広福が別々の核となるのか、福岡・広島連合ないし札幌・仙台連合を考えていくのか、経済的なメカニズム、それを睨んだ地方の選択かと思います。そういう点では、冒頭のマラソンの話ではありませんが、福岡と広島が一緒にトップ争いをしながら、やはり西南日本をリードしていくと考えるべきだと思います。

仙台も東京パワーの中で殆ど飲み込まれるのかもしれません。東北の拠点と言いながら、なりきれないでいる。仙台が北東交流圏の拠点都市となりうるのか。札幌の場合は完全に北海道の拠点ですが、ガリバー的独占状況となっています。といいますか、札幌の場合はあまり連携する相手さえいない、これが札幌の苦しみでもあります。

10. おわりに

そういうふうにみますと、福岡・広島・札幌・仙台とそれぞれ新しい時代に合った地域作り、住みよい豊かな都市を武器にして、周りの500万から1000万の地域住民のあらゆる高次都市機能の拠点として何をやるべきなのか。これが中枢都市の責任であり、これをうまくやった所が、新しい時代の担い手に成り得るのかなと思っています。

福岡を強気で成長戦略を進めてきたお蔭で、周りから相当怨嗟の目で見られています。なんでも福岡が吸収し、若者の消費行動もだいたい福岡に行ってしまいました。収奪しっぱなしだということで、頑張ったお蔭で叩かれています。水がない、土地も高いという都市を作りました。今こそ福岡はアクセルの踏みっぱなしをやめて、北九州と熊本と連携をしながら北部九州1000万経済圏を作るべきです。いろんな機能の集積、この切替えを福岡のトップができるかという問題も出てきます。それぞれ戦略というのは大変難しいとは思います。札仙広福が21世紀に向けてどういう戦略をとるのか。その時国土政策とどうリンケージしていくのか。おそらくこれからの中枢都市の分かれ目になると思います。手を繋ぎながら競争する。というのが、これからの福岡と広島のありようと思います。どうも御静聴有難うございました。

参考文献

1．ＮＩＲＡ研究報告・東北開発研究センター編
『分散型国土形成と地方中枢都市に関する研究』1994
（本報告の図表はこの文献より引用－図6を除く）
2．国土審議会計画部会
『21世紀の国土のグランドデザイン
—新しい全国総合開発計画の基本的考え方—』1995
3．矢田俊文『国土政策と地域政策』大明堂　1996（３月刊）